

平成26年度 国立江田島青少年交流の家教育事業

われら瀬戸内探偵団～瀬戸内海の環境を考えよう～ 実施報告書

【趣 旨】 近隣の瀬戸内海岸での生物観察・調査からスタートし、瀬戸内海域へフィールドを広げ、環境問題について考えていく体験的・問題解決的な環境学習を実施する。これらを通して、いま自分達に何ができるかを考え、環境保全・保護に配慮した積極的な行動がとれる意欲・態度を養う。

【主 催】 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立江田島青少年交流の家

【共 催】 江田島市教育委員会

【期 日】 平成26年8月18日(月)～8月20日(水) 2泊3日

【会 場】 国立江田島青少年交流の家及び荒代海岸周辺
広島大学生物生産学部附属練習船「豊潮丸」、江田島・能美島周辺の海域

【対 象】 小学校4・5・6年生

【参加者数】 24名

【講 師】	広島大学大学院生物圏科学研究科	准教授 橋本 俊也
	広島大学生物生産学部附属練習船「豊潮丸」	職員
	大柿自然環境体験学習交流館	館長 西原 直久
	国立江田島青少年交流の家	企画指導専門職

【企画・運営のポイント】

- (1) 参加者の意欲を高め、課題意識をもって体験的・問題解決的な環境学習に取り組ませることを目的として、参加者を探偵団として設定し、「瀬戸内海はきれいなのか？」という探偵依頼を提示、これに応えることを使命として学習の流れを明確にする。
- (2) 瀬戸内海の環境に対する参加者の意識に働きかけ、また、ひとつの生物指標を得るために、江田島の海岸や干潟について詳しい大柿自然環境体験学習交流館館長の西原直久氏（理学博士）に指導を依頼し、江田島の海を活用して調査・体験を行う。また、瀬戸内海における環境についての理解を深めるために、瀬戸内海の環境に精通する広島大学大学院生物圏科学研究科橋本俊也准教授による講義を行い、瀬戸内海における環境についての情報を収集するために、広島大学附属の練習船「豊潮丸」に乗船し、海洋観測に取り組む。
- (3) 瀬戸内海の環境がどのように変化し、環境に対して自分たちに何ができるかを考えるために、参加者が体験活動で得た情報をもとに、グループで話し合い活動を行う。
- (4) 問題解決的な学習に対する達成感を味わわせ、環境問題に関して行動化を促すことを目的として、環境の保全のために参加者自らが考えた活動を全員で行う。

【活動の実際】

18日（月）1日目	19日（火）2日目	20日（水）3日目
10:00 受付	6:40 起床	6:40 起床
10:30 開講式 オリエンテーション	7:10 つどい、清掃、朝食	7:10 つどい、清掃、朝食
11:00 自己紹介、班編成	9:30 交流の家発小用港へ	9:00 「海辺の生き物観察」
12:00 昼食	10:00 「豊潮丸に乗って海洋 観測しよう」	12:00 昼食
13:00 「瀬戸内海の世界を探 ろう」	15:50 小用港着	13:00 退所点検
17:00 つどい、夕食、入浴	16:30 交流の家着	13:30 まとめ、閉講式
19:00 「なぞの生き物を観察 しよう」	17:00 つどい、夕食、入浴	14:30 解散
21:30 就寝	19:00 「探偵依頼にこたえよ う」	
	21:30 就寝	

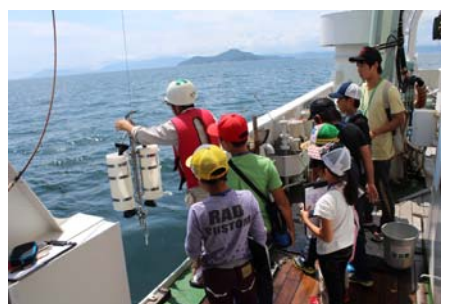
開講式・オリエンテーション（アイスブレイク）



「瀬戸内海の世界を探ろう」・「なぞの生き物を観察しよう」



豊潮丸での講義・海洋観測



「探偵依頼にこたえよう」



「海辺の生き物観察」



【成果と普及】

- (1) 「瀬戸内海はきれいなのか？」という探偵依頼を課題として提示し、これを解決するという学習の流れを明確にしたことで、参加者の目的意識が高まった。3日間の学習において、何のために活動しているのかという意識は、とかく個人的な興味に走りがちな場面で軌道修正するのに大いに役立った。また、この年齢の参加者にとっては、興味を持ちやすい設定なので、真剣に調査結果をメモしたり話し合ったりする姿が見られた。
- (2) 「瀬戸内海はきれいか」という探偵依頼に対し、6グループのうち、3グループが「きれい」、1グループが「汚い」、2グループが「場所によって違う」と結論付けた。話し合いでは、体験したことや見聞きしたことがたびたび登場していたので、講義や演習が有効であったことが分かる。また、多様な視点で整理した各グループの意見が交わされることで、環境についての理解を相互に深めることができたと言える。
- (3) 参加者への事前・事後アンケートを比較すると、瀬戸内海への興味関心について、とてもある・あると答えた参加者は、75%から91%に上昇した。また、瀬戸内海を守るために「ごみをへらす」とだけ記述した参加者が、事後では「むやみに生き物を殺さない、食べない物はとらない、ごみをすてない、油を流さない」等、より具体的に記述している例がほとんどで、「瀬戸内海について、もっと知りたくなった。」等の記述も見られ、環境に配慮しようとする意欲・態度が高められたことがうかがえる。
- (4) 瀬戸内海への環境は、あなたと関係があると思うかという問いには、とても思う・思うと答えた参加者は、67%から83%に上昇した。参加者が、自分と環境の関わりについて認識を高めたことが分かる。さらに、瀬戸内海を守るために、何かできることがあると思うかという問いには、とても思うと答えた参加者が42%から65%へと上昇している。また、「家族や友達に今回学んだことを教えてあげたい。」等、環境に対する意識が向上したり、行動化が望めそうな記述も見られたりした。海洋観測、生き物観察、ごみ拾い等の体験的な学習の成果であると考えられる。

【今後の課題】

講義や演習の内容は、講師に専門的なものをできるだけ平易に説明していただいているが、各活動での参加者の理解度に大きな差が生じていた。また、申込者数が多い状況の中、前回参加した者が2名参加し、その参加者にとっては、新鮮さに欠けるようであった。以上のことから、これまでの申込者の状況を集計し比較分析する。また、対象学年を高学年のみにする、過去に参加したことがある者は申込みできない等の検討も行うことが必要である。